

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」で 15周年、ご支援・ご協力に深く感謝申し上げます

私たちは「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」を合言葉にして、木曾川流域（木曾川、飛騨川、愛知用水）の上下流交流・連携を目的に「水源の里を守ろう 木曾川流域みんなの会」を始めました。2008年9月13日に第1回「水源の里を守ろう 木曾川流域集会」を開催してから、2023年9月で15周年を迎えます。今日まで、右往左往しながら“歩み続ける”ことができたのは、皆様のご支援ご協力の賜物です。深く感謝申し上げます。

現在にまでに、6回の木曾川流域集会の開催、「木曾川流域図」の制作、みんなの会ニュースを18号、会員だよりを37号発行、「木曾五木キャラクター」はがきの作成を行ってきました。

「上流へのまなざし」「上流への感謝」を“かたち”にしたいとの思いから、上流域の生産品であるミネラルウォーター、甘酒、味噌、酒、漬物、木工製品などを都市部の人びとに安全・安心な商品を宅配している名古屋生活クラブなどを通じて購入してもらい、その売上の2%を「木曾川流域水源の里基金」として積み立てて行く取り組みを2008年12月にスタート。

「水源の里基金」を活用して、上流の木曾町にある長野県木曾青峰高校インテリア科の生徒たちに、地元の間伐材でベンチや木製玩具の制作を依頼。それらの作品は2011年から名古屋市植物園（ベンチ）や名古屋市科学館（木製玩具）で、市民、親子の皆さんに使われています。

この作品作りに参加した高校生は今日まで44人に上ります。

木曾川源流の里・長野県木祖村に約180坪の畑を借りて大豆作りを2011年から始めて、2023年5月から13年目になりました。私たちは“行きつけの場”を作り、上流域の人びとと顔の見える関係を築いてきました。地元の人びとから支援・アドバイスを受けながら大豆づくりを続けています。収穫した大豆は長野県木曾町の小池糶店で味噌にしてもらっています。私たちの味噌の名前は『みなもと』です。いろいろな思いを込めて名付けました。

「森は水の源、水は命の源、川は命のつながり」として、私たちは木曾川流域の上下流交流・連携を取り組んできました。暮らしの中の「水」を通して、生物多様性や「かけがえのない地球」（宇宙船地球号）の視点から捉えて、地域的に考え、行動してきました。

私たちの取り組みについてのご意見、ご感想や都市部と農山村の交流・連携、流域圏などをめぐるとご提言をみんなの会15周年記念号として、皆様からお寄せいただきました。心からお礼申し上げます。

確かな歩みに、心から敬意！

四方八洲男（元綾部市長）

綾部市で水源の里条例をつくってから16年になる。かねてから知己だった斎藤まことさん、河崎さんたちが訪ねてこられ、「みんなの会」をつくられてから15年。地味

だが確かな歩み＝まさに継続は力だった。その尽力に心から敬意を表したい。

一周おくれのトップランナーという言葉があるが、水源の里は次の時代に必ず脚光を浴びると確信して取り組んだが、いよいよ、その風が吹きはじめた。「ポツンと一軒家」というTV番組が結構な視聴率を保っているが、コンクリートに囲まれた都市住民からは、その不便ささえ大きな魅力になっている。

この風をさらに強くするために――

①熱意のある行政職員 ②ほほえみをもって迎える地元住民 ③上流は下流を思い、下流は上流に感謝する一みん・みんの会のような仲介者だ。関係人口という言葉が流行っているが、それだ。

×

×

×

みん・みんの会が、若者を魅きつけ益々発展されることを京都・綾部の地から、私は確信している。



第5回水源の里を守ろう 木曾川流域集会で講演する四方さん＝2013年3月、名古屋市

下流へおいしい水を提供できる継続する地域づくり

原 久仁男（木曾町長）

平素より大変お世話になっております。改めて感謝申し上げます。

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」という合言葉にとっても感動し当初から参加させていただきました。早いものでもう15周年という節目を迎えられました。心よりお祝い申し上げますとともに、これまでの取り組みられましたことに心より敬意を表します。15年前に木曾広域連合の責任者としてかかわらせていただいたことから河崎さんを始めみなさんと交流を重ねさせていただきました。流域集會に何度もお邪魔をさせていただき、とても良い機会に恵まれてきたと思っています。また木祖村において大豆づくりを取り組みだし、その収穫の機会に偶然ではありますが宿舎になっている旅館にて、たびたびお会いできるなどとても深い縁を感じています。また、木曾の高校生たちにおもちの製作の機会をいただいたり、木曾の産物を生協という組織を通じて販売いただいたりと感謝しています。しかし、この3年間はコロナ感染という人類にとりまして極めて大きな試練をいただきました。お会いすることもままならず、お互い歯がゆい思いやら悔しい思いが大きな年月でありました。

木曾五木をイメージしたモニュメントをJR木曾福島駅前という提言もいただいておりますが、未だ実現しておらず申し訳なく思っています。おかげさまで木造の地元産材を使つてのモデルハウスとして役場庁舎ができ丸2年を経過いたしました。我が町の最も重要な取り組みとして林業があり、継続する山づくりを命題として100年先を見据えての具体策の検討に入っています。

下流へおいしい水を提供し続けられる継続する地域づくりに、これからも懸命に努力してまいります。共に頑張つてまいりましょう。

原発のない環境で、水との生活が普通に感謝できるようにしたい

茶畑 和也(イラストレーター)

「木曽川流域みん・みんの会」15周年おめでとうございます。

15年ほど前にみん・みんの会の「水源の里基金認証」マークを描いてとご依頼をいただきました。それ以来お付き合いをさせていただいています。



もう15年ですか！時の進むのははやいです。

「森は水の源、水は命の源、川は命のつながり」として、木曽川流域の上下流交流はとても大切な取り組みだと思います。世界では約4分の1の人々が安全な飲み水を手に入れることができません。

僕たちはとても幸せな環境にいることを感謝しなければいけません。

こんな幸せな地域にいても、とても心配なことがあります。

特に40年を超えた老朽原発の再稼働です。福島原発の事故の後、原発は40年で止めるとありました。その後、今国会では最大で20年の延長を許可し、止まっている期間は含まないことになってしまいました。

10年止まっていたら最大40年+20年+10年、なんと70年も動かせることになりました。こんなに流域の地域の人々が命の水を大切にしているのに納得がいきません。一度事故が起こり、放射能が漏れ出せば、1300万人の水瓶の琵琶湖や木曽三川は汚染を免れません。

名古屋で裁判中の40年老朽原発廃炉訴訟！国との訴訟は7年になりますが、なかなか時間がかかります。

もしその間に原発の老朽化や大地震でと、考えたら「ゾッ！」とします。

かけがえのない環境の中での水との生活が普通に感謝できるようにしたいです。

今年は例年にないほどの酷暑です。「エアコンを使って体を守ってください」というニュースは毎日のように流れますが、電力量がひっ迫しています、「節電してください」のニュースは一度も見なかった。もう少し大切な情報を流して欲しいものだと思います。

川の上流と下流で「共に生きる」を紡ぐ、「土徳を積む」営み

花崎 皋平(さっぽろ自由学校「遊」会員、哲学者)

みん・みんの会15周年、おめでとうございます。

私は「みん・みんの会」の運営を担っている河崎さんとは1970年代の市民運動からの友だちです。「みん・みんの会」の活動は、初期の頃から関心を持って見つめてきました。

いま日本列島の様々な地域で、地域に根ざして産業や文化の発展をうながす活動が営まれています。私が知るところは多くありませんが、山形県長井市のレインボープランは都市近郊の農業と都市住民とをつなぐ循環に成功して発展しています。水俣の無農薬甘夏みかんを支える全国のネットワークも生きています。成田空港建設に反対した三里塚農民のワンパック野菜の購入ネットワークもまだ機能しています。そのほかにも地域循環型の生産と消費のネットワークは各地にあります。沖縄八重山列島の中の西表島にもそうした文化の継承者がおられました。そうした活動には、私が民衆思想家と呼ぶ語

り手、書き手がいるように思います。いま、地域に根ざし「共に生きる（共生）」という思想を語る思想的営みが共感を得つつあります。

「みんなの会」の活動は、木曾川流域の上下流交流と連携を目的とする、他にあまりないユニークな活動で、地域の生活文化や生産と消費の循環を進めています。

浄土真宗の三河別院を訪ねた時、「土徳を積む」という言葉をおそわりました。川の上流と下流の双方から「共に生きる（共生）」文化を紡ぎ出す活動は、まさに「土徳を積む」営みではないでしょうか。

広く地球環境を見ると、生態系の危機が叫ばれ、気候変動が激しくなり、市民のエコロジカルな自覚も高まりつつあるように見えます。地域の住民が共に生きる思想と活動を、そして自然を友とし自然を敬う古来の思想、文化を改めて発展させることが重要になってきています。「みんなの会」が具体的な活動のなかで発見したり、学んだりした思想や文化をお互いに伝えあい、つぎの世代に残すことを期待します。

「関係人口」は都市と農山村の分断を防ぎ、つなぐ働き

小田切徳美(明治大学農学部教授)

「関係人口」が話題になっている。この言葉はいまや新聞、テレビでも普通に使われ始めている。「観光人口よりは深く、定住人口よりは浅く、地域に関わる者」のことである。このような関係人口が農山村の内発的発展と合流し、地域の再生へと前進する。各地に見られる動きでもある。

まさにこうした動きの源流のひとつが、「みんなの会」である。筆者は活動初期にその取り組みを知り、農山村再生に向けた「新しい動き」として、拙著に紹介させていただいた(『農山村再生』2009年、岩波書店)。

それから、15年。筆者自身は、残念ながら、静かに応援することしかできていないが、「みんなの会」の地道な活動は木曾川上流地域の再生のエネルギーのひとつになっていよう。特に、高校との連携は、「人材」という未来の力への関与であり、息の長い取り組みとして注目される。

しかし、関係人口の役割は、単に直接地域に関わるだけでなく、より大きな働きをしている。それは、都市と農山村をつなぐ働きである。日本社会はいつの間にか壊れやすい社会になっている。それを私達はコロナ禍で経験した。感染拡大が進む中で、感染者—非感染者、若者—高齢者に加えて、都市住民—地方住民など、縦横の分断と対立が生まれてしまった。それらが、放置され、根深くなり、社会が脆くなっている。現時点ではそのような動きは潜在化しているが、いつでも再度、顕在化する可能性がある。それに対して、関係人口は亀裂の架け橋やそれを防ぐ役割を担う。

「みんなの会」の活動も、そのような役割を果たしている。振り返れば、15年前の「木曾川流域集会」で宣言された文章に次の言葉がある。「人と人が繋がる、支援の輪を広げる、そして多くのひとびとが、『上流は下流を思い、下流は上流に感謝する』意識を持つようになる」。まさに関係人口としての大きな役割がスタート時点から構想されていたのである。

こうした大きな構想の着実な前進を関係者ととともに喜びたい。

共感・応援する人がいると思うと、「一歩前へ」の気持ちに

渡邊 昇(飛水食品・七宗町)

岐阜県加茂郡七宗町の飛騨川(国道41号線)沿いで、昔ながらの手づくりの蒟蒻(こんにゃく)、豆腐、ところてんを製造・販売＝写真＝しています。



みんな・みんなの会のみなさまとの交流は、10年ほどになります。

私の暮らす地区も高齢化、過疎化は急ピッチで進んでいます。昨年、隣の家が空き家になりました。1、2ヶ月も過ぎないうちに、イノシシ、シカなどの野生動物が空き家の周りの畑へ進入し、石垣を崩すなど、畑の形が無くなり、雨が降るたびに水の道が出来、土砂が谷へ流れ込むようになりました。もう收拾がつかえません。

人が住まなくなると、一気に変わってしまうのだと、あらためて思い知らされました。

工場の横の谷も以前は、大きな水車が3台も回るほど、年間を通して水量があったのに、今は雨が降ると一気に流れてしまい、時々水の流れていないことがあります。ホタルもいなくなりました。山が荒れ、保水力が全然ありません。これからどんな変わり方をするのか、想像出来ません。

でも、みんな・みんなの会の「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」に共感し、応援して下さる人がいると思うと、「一歩前へ」という気持ちになります。

少し、抵抗してみようと、回りのスギ、ヒノキを伐採し、モミジ、サクラ、ハナモモなどの植林を始めました。近年、ササユリも咲き始め、少しずつ前へ進んでいます。微力ながら、少しは、力になりたいと思っています。

二つの気になっていること

瀬瀬美千世(日本消費者連盟、埼玉県在住)

岐阜県の本曾川流域の町に生まれ育ち、今は本曾川から遠く離れた関東圏に住み、会の活動にもなかなか参加できない身でおこがましいのだが、せつかくの機会をいただいたで「気になっていること」を書いてみたい。

一つは、毎年ニュースで紹介される、長野県の本曾青峰高校インテリア学科の生徒による木工の玩具づくりと、名古屋市内の施設への贈呈について。上流と下流がつながる、まさにみんな・みんなの会ならではの発想と、創造性豊かな作品に毎回感心しながら、それらを製作した生徒たちのその後が気になっている。高校卒業後、彼ら彼女らは下流を思う上流の民として森や木にかかわる職業についたのだろうか、建築関係の学校に進学したのだろうか、インテリアデザイナーの道を目指して頑張っているのだろうか。これと関連して、本曾町に木工関連の作業をしたり、木工の技術を磨ける場はあるのだろうか。名

古屋市内で目にした木製のベンチや玩具に魅せられた都会の若者が、森林豊かな上流に遡っていくための拠点があったら素敵だなあと夢想している。

もう一つ気になっているのは、全国水源の里連絡協議会のこと。「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」という理念を同じくする自治体が全国に140以上あるという。各自治体の現状はどうなっているのだろうか。みん・みんの会のように、この理念に呼応した市民団体も全国にあるのだろうか。もし、そのような団体と交流できれば、会の活動の幅がさらにひろがるのではないだろうか。

新しい木曾川地図や水源保全基金を考えたい

斎藤まこと(前名古屋市長・わっぱの会)

2008年2月に京都府綾部市の四方八洲男市長(当時)さんのところに行きました。上流域に取り残された限界集落を水源の里と呼び換え、綾部市水源の里条例が2007年に作られ、また「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」を合言葉にする全国水源の里連絡協議会が結成されました。それで都市部の木曾川流域でもやった方がいいと思って、皆さんと一緒に「水源の里を守ろう 木曾川流域みん・みんの会」をやり始めました。上流の木曾川、飛騨川の自治体との交流や、上流域の生産品への応援、木曾青峰高校インテリア科のベンチや木製玩具づくり、小池糍店と一緒にやる味噌づくりなど、これからもやらなければと思っています。

そして、2012年に2,200部作製した『木曾川流域地図』がもうじきなくなります。それで「新しい地図」をどうするか考えなくてはいけないのです。あたらしい地図は、WEBなのか、森林地図もやるのか、どうするのかです。また、私が市議の時に名古屋市本会議で質問をしましたが、名古屋市の水道料金の一部を積み立てる水源基金、つまり「1トン1円の水道基金」を「水源環境保全水道基金」のようにやらなければと思っています。

そのためにも、「木曾川流域みん・みんの会」と一緒にがんばろうと思います。

味噌の天地返し 大豆畑の草取り

8月5日、木曾町木曾駒高原にある小池糍店の味噌蔵にて、味噌の天地返しを行いました。

みん・みんの会のスタッフと名古屋生活クラブ、木祖村地域おこし協力隊の方も参加し、総勢7人で大きな味噌樽に取り掛かりました。

この天地返しの作業は春に仕込んだ味噌をはじめの夏の一番暑い時期に天地返しすることで醗酵を均一にするとともに糍に活力を与



え頑張ってもらうため、二年醸造の味噌にとってはとても大切な作業です。

一つの樽に三人一組となり、スコップで味噌をすくいバケツで別の樽に移し替える単純な作業ですが、衛生面での気遣いは非常に大切で、かつ外にこぼさないようにしなければなりません。

目標は三樽でしたが時間切れ。少し残ってしまいましたが、みん・みんの会の味噌「みなもと」の小さな樽二つも天地返しをすることができました。

夜は小池糍店・唐沢さんたちのおもてなしで楽しい食事と交流会。鉄道や電車の話や福島原発の影響で、今でも苦闘する生産者とどう向き合うかなど、多岐にわたった話で盛り上がりました。

翌6日、強い日射しの下、木祖村に移動し大豆畑の草取りを行いました。

3週間前の草取り後、アツという間に草だらけとなっておりました。

地域おこし協力隊の方が朝4時からのトウモロコシ収穫作業を行ってきたにもかかわらず、畑に駆けつけてくれて、草刈り機を巧みに操作して多くの草を刈り取ってくれました。



マルチの穴の中の草も皆で取りきることができました。

大豆の葉が前回の木酢液散布の時は虫食いだらけでしたが、新しくきれいにそろい始めています。その間には小さな花が咲いて、いよいよ「サヤ」ができて始めます。しっかり大豆が実るのを祈るのみです。秋の収穫、脱穀作業に皆さんも参加してみませんか。 連絡先：近藤 (090-4150-6156)

第47回木曽音楽祭(8月24~27日)

～歴史を刻んで49年……国内最高の室内楽～

唐沢 尚之(小池糍店)

8月24日(木)から27日(日)まで第49回木曽音楽祭が、長野県木曽町にある木曽文化公園文化ホールなどで行われます。国内の一流の音楽家が1週間前から木曽へ来ます。その間、地元のボランティアの人達が自分たちで献立を考えて、木曽の郷土料理や得意料理を作り、演奏家と一緒に談笑しながら食事をします。「美味しい!」「これが木曽だよ」「先生、これは今年の新メニューです」「レシピを教えてください」…、ボランティアと演奏家が一つになって共に時間を過ごし、コンサートでは国内最高峰の室内楽になっていきます。



毎年行われ、歴史を刻んできて49年になりました。半世紀前「オリンピックだ」「万博だ」「GDP世界2位だ」と急速に豊かになっていき、科学の進歩で自動車を筆頭とする機械技術の普及は、古い日本の行事や伝統を置き去りにしていくようでした。そんな時代に、木曽の町を訪れる人はめっきり減っていました。長い目で見て木曽の発展、人の誘致につながっていければという思いと、

なかなか質の高い音楽を生で聴ける機会が少なかった事から、文化水準を高めると同時に、町おこしを願い、先々代の唐澤美貴が思いつき、元町長であった夫の唐澤久雄と共に始めたのがこの音楽祭です。都市部では数々の演奏会が行われていますが、木曾の自然の中でこのような形態で生まれるハーモニーの素晴らしさに毎年たくさんのファンが木曾を訪れています。

来年で50回を迎える音楽祭。改めて歴史などを考えるとすばらしい木曾の財産だと感じます。しかし人口減少も伴い、運営（ボランティア不足）は年々厳しくなっているのが現状です。一人でも多くの方に、この木曾でしか味わえない音楽祭に訪れていただき、素晴らしいハーモニーに触れて木曾音楽祭のファンになってもらいたいと願っています。そして皆様も一緒にできる範囲でボランティアに参加することで、音楽祭を通して関係人口になって盛り上げて下されば大変すばらしいことと確信しています。



(木曾音楽祭 HP)

第16回木曾の手仕事市～9月9日、10日開催～



9月9日（土）10日（日）には「宿場町のクラフトフェア」と題した第16回木曾の手仕事市が、木曾町で開催されます。日本全国から工芸作家が集まり、空き店舗や道すがらの駐車場、旧中山道に150ものお店が並びます。宿場町をゆっくり散歩しながら楽しめるちょっと変わったクラフトフェアです。すべてボランティアによって運営されていて年々来場者も増えています。「木曾の町」と「人」に触れ合うには最適なイベントです。



音楽祭と共に夏の木曾に触れ合えるいい機会ですので是非いらしていただき、木曾を知っていただきたい。表街道だけではなく、ふとした小路も木曾の魅力の一つです。 (木曾の手仕事市 HP)

お願い 9月17～18日（日、祝）「いきいき今池お祭りウィーク」が開催されます。みん・みんの会は今回も木曾広域連合の方々と共にブースを出す予定です。皆さん、ブース参加のご協力もよろしくお願ひします。

<お知らせ> (予定)

みん・みんの会 15周年の集い

○2023年12月3日（日）午後2時～

名古屋市北区山田町2-11-62 大曾根住宅1棟1階

「ソーネおおぞね ホール」で開催
します。よろしくお願ひします。

水源の里を守ろう

木曾川流域みん・みんの会

☆共同代表：河崎典夫、伊澤真一

☆事務局長：近藤進

☆顧問：斎藤まこと（前名古屋市議）

☆連絡先：〒464-0075 名古屋市千種区内山

3-7-11 FAX 052(745)9558

TEL 090-4150-6156（近藤）

090-5618-7894（河崎）

HP: <http://www.kisogawaminmin1.net/>

e-mail: suigennosato@gmail.com